

オーウェルよ、フランスへようこそ——再び！

【訳者注】ファシズム国家というアメリカの現実、その同盟国フランスにも飛び火する。2度にわたるパリのテロ襲撃以来、これが顕著になったようである。イギリスのキャメロン首相は、9・11の政府公式説明を疑う者は許さない、とファシズムを宣言したが（2015/5/31「虚偽の上に立って…」）フランスでも同じことが起こっているようだ。

このタイトルは、George Orwell の1940年代に書かれた、現在を予言したかのような小説『1984』を指している。

ファシズムとは何か？ それはこの冒頭に要約されている——より大きな国家犯罪を指摘する者が犯罪者となる、“テロとの戦い”を口にする者こそ最大のテロリストだという事実を指摘する者がテロリストになる、そういう体制のことである。

By Finnian Cunningham

February 29, 2016, Information Clearing House

フランスは現在、リビアでの“秘密の戦争”で奮戦している——国際法を堂々と無視して。しかしこの犯罪行為を報道するのは犯罪である！ フランスが陥ったオーウェルの二重思考（double-think）の世界へようこそ！

フランスの新聞「ル・モンド」の今週のある報道は、この北アフリカの国での、フランスの密かな作戦行動の蓋を取ってみせた。それによると、フランスの特殊部隊が、イスラム国テロ集団を空爆せよという隠れたミッションを実行中である。

<http://www.reuters.com/article/us-libya-security-france-idUSKCN0VX1C3>

ル・モンドによれば、このミッションは、フランス大統領フランソワ・オランドの承認を得ている。特殊部隊は、イスラム主義者に対する攻撃に備える“慎重な行動”のために配備されつつある。

すると直ちに、フランスの防衛長官ジャン-イブ・ル・ドリアンが、大量のレンガのように、この新聞にのしかかり、ル・モンドは、国家の安全に“危険を与えた”可能性があるとして主張した。

国有のニュース・チャンネル「フランス 24」は、ル・ドリアンの代弁者を引用してこう言った——「秘密の作戦が行われているときには、その目標は、兵士や作戦の安全のために、それを明らかにしないということだ。」

あるいはもっと正確に言えば、他国の主権と国際法に対する犯罪的な、不法な侵犯が行われているときには、その目標は、それを一般人に明らかにしないということだ。そうしないと、このような犯罪を行う者の正体、すなわち、ならず者国家犯罪者がわかってしまうからだ。ル・ドリアン氏の今週の写真が、いつもより怖い顔だったのは不思議ではない。

その反撃は、ル・モンドにとって、また、これを報じたどんな他のニュース・メディアにとっても、厳しいものでありうる。フランス政府は、この報道について“極秘情報のリーク”があったのかどうか調査中だと言っている。フランスの“防衛機密ルール”は、3年以下の禁固と4万5000ユーロ（5万ドル）の罰金を規定している。

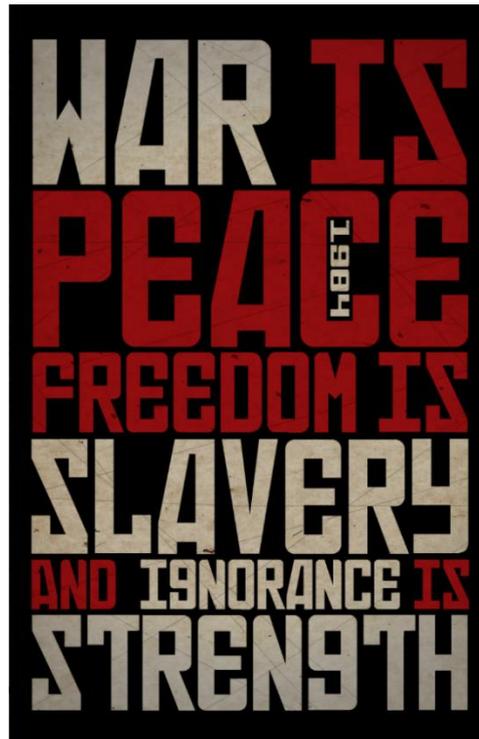
どういうことか、はっきりさせよう。ル・モンドによれば、フランスのエリート軍と、国家情報局 DGSE に属する職員が、現在リビアにいて、ジハーディストに対する空爆の命令をしている。しかし、このフランスの国家支援による不法行為を報道することは、潜在的に“犯罪である”——と、国家主権を犯すという、より大きな罪を犯している者たちが言っているのである。

独立したジャーナリズムを寒からしめる効果が、明らかに意図されている。政府は罪を犯す、これは報道するな、というのが合言葉のようである。

ル・モンドは、西側が戦争を——やはりリビアで——引き起こしたのを暴露した、唯一の報道機関ではない。先週ニューヨーク・タイムズは、米、英、仏、およびイタリアの特殊部隊が、リビアで作戦行動をしていると報じた。

http://www.nytimes.com/2016/02/22/world/africa/us-scrambles-to-contain-growing-isis-threat-in-libya.html?emc=edit_th_20160222&nl=todaysheadlines&nid=65464666

こうした合同の隠れた軍行動は、彼らの行動を許可するどんな法的指令も、受けていないと理解されている。このような行動への国連の指令もなく、リビア政府が——かりにあったとして——承認を与えたということもない。これは完全な、大書された、釈明できない不法行為である。



2011年に、アメリカと他の NATO 軍が7か月に及んで、リビアを徹底的に爆撃し、3万に及ぶリビア人の死者と、ムアンマル・カダフィ政府の転覆、それに NATO の支援するジハードイストによる彼の殺害をもたらして以来、この国は、反目し合う民兵団に引き裂かれた、完全な混沌状態にある。

リビアに存在したいかなる中央権威も粉砕されてしまった——NATO によって。フランス政府、特に前サルコジ大統領下の政府には、かつて栄えたリビアを、この惨めな破滅した国家にしてしまった重い責任がある。

それ以来、アメリカとその西側同盟国は、思いのままにリビアを爆撃することができている。昨11月、アメリカの空爆で、イスラム国の司令官アブ・ナミルが、この国の東部で殺されたと言われている。先週は、別のアメリカの空爆で、トリポリ西の Sabrathra の IS の訓練基地と言われるものが攻撃され、40人以上が殺された。

https://www.washingtonpost.com/world/reports-airstrikes-target-suspected-islamic-state-base-in-libya/2016/02/19/e622c12a-d6f7-11e5-be55-2cc3c1e4b76b_story.html?wpmm=1&wpisrc=nl_evening

この最も新しい攻撃のあと、亡命してチュニスに本拠を置き、西側諸国がかりに作ろうとしている、リビアのいわゆる“統一政府”でさえ、この軍事行動をリビアの主権の侵害だと非

難した。<https://www.rt.com/news/333130-libya-us-airstrike-sabratha/>

NATO 諸国はリビアの主権を破壊した。それでも、西側が認める政府らしいものでさえ、西側の軍事介入に抗議したのである。

これは言語道断のオーウェルの世界である。爆撃された国家、破滅した国家、ジハーディストによる混沌——そこで次に西側は、この滅ぼされた国に自分がテロ集団を作らせ、これを敗退させると称して爆撃する。それに対してきちんと抗議する国家的権威も存在しない。なぜなら NATO がそのような権威を消滅させたからである。そこで、あるニュース組織がこの国家スポンサーによる犯罪行為の、最も新しい歪曲を報道すると、それは国家の安全に“危険を与える”ものだと脅迫される。

これを位置付ける他の表現はない。フランスは、アメリカに導かれた他の西側共犯者と同じく、完璧なファシズムへと転落しつつある。法の無視がその基準である。他国を爆撃することが、運命的にきめられた、神に与えられた権利となる。そしてそれを報道すれば、起訴の対象となる。

これに驚かねばならないのはなぜか？ フランスは 75 年前にファシズムを奉じたが、それはヴィシー (Vichy) 国が、喜んで、ナチスドイツとその民族抹殺計画の熱心な協力者になったときだった。何万というフランス市民が、フランスの為政者によって汽車に乗せられ、ファシストの死の収容所へ送られた。

今日、“テロとの戦い”——パリ政府がリビアとシリアにつくり出したテロだが——という見出しのもとに、フランスは、自国の市民に対して非常事態を押し付けている。フランス大統領オランドと、彼のやかましい首相マニュエル・ヴァルスは、イスラム国テロ集団に対し“フランスは戦争状態にある”と宣言している。このテロ集団とは、リビアとシリアの政府を倒すために、フランスが不法にジハーディストを援助したことによって、生き返ったネットワーク集団である。

フランスの国家“非常時権力”は、11月13日のパリのテロ襲撃以来、わずかの間に、数千のフランスの家庭の、令状なしの家宅捜査を行わせている。フランスの支配者たちは、テロのバックファイアを恐れて、市民に対してファシスト権力を行使しているが、このバックファイアは、そもそも彼らが国際的無法行為によってつくり出したものである。

現在、リビアを破壊したテロの国家スポンサーたちは——“テロとの戦い”という口実で一—リビアへ戻って、特殊部隊によってこの国を爆撃し略奪するための、白紙委任状を自分に

与えているのである。

一歩下がって、それが何であるかを見るがよい。我々は、気まぐれな無法行為、ファシズム、地獄行きの道を歩いている。国際犯罪で責任を問われ、起訴されるべき政府の者たち自身が、彼ら自身の自己言及的犯罪行為のもとで、弾圧という更なる罪を犯しているのである。そして一般民衆が自然にこれを知ると、政府のならず者たちは、彼らの怪しげな自己正当化である“国家安全保障”を振り上げて、“違反者”たちを監禁すると脅す。

“言論の自由”とか“人権”といった、うぬぼれたフランスの概念は、とうの昔のものとなった。一方で、ファシスト犯罪に現実に加担したという、卑しむべき歴史は見事に看過され、記憶の穴の底へ押し込まれている。なぜそうなるのか、我々は知っておくべきだ。それは、同じフランスの支配体制が、再び、過去の邪悪な暗黒を胸に抱いているからである。

オーウェルよ、ようこそ——再び！